

考えられた歩み

～ 札幌スポーツ紀行 2010年9月22日(水)～23日(木/祭日)

SV2004 泉田 和雄

北洋、極北、北海道・・・千歳空港についた途端に目に飛び込んでくるのは、美しい風景写真と「北」の文字、それはまるでひとつのブランドであり、独立した文化圏であることをアピールしているように感じるほどです。けれどそれこそが日本の各地に住む人々がこの地に惹かれる大きな理由なのかもしれません。

今回の札幌行きは、日本ハムファイターズが札幌ドームで実施しているボランティア活動を知り、来年仲間とともに訪問するための下調べが最初の目的でした。けれど、二日間という時間をフルに活かすためネットワークを通じて交流が生まれた人々にお願ひ短い時間でしたが話すことで、スポーツ施設の表側だけではなく、そこにいる人の思いの一端も知ることになりました。

札幌の奥座敷といわれる定山溪温泉、市内からは自然の中を車で走ること約40分あまりですが、多くの温泉地同様観光客の減少が続いているといいます。その温泉街のはずれにNPO法人北海道バーバリアンズラグビーフットボールクラブの施設があります。その特色は地域の中で必要とされる「総合型スポーツクラブ」をめざしていること、「定山溪グラウンド」を拠点として整備をすすめていること、その地域に密着して地域活性化をめざしていること、アカデミー活動などを通じて普及育成強化をはかっていることなどにあります。NPO化して11年を経過し、2007年に取得したグラウンドなどを中心に今着々と設備の整備に取り組んでいます。

あたりが緑、また北海道らしい白樺林の中にグラウンドはありました。元々陸上競技場だったり野球場だったりの場所を根気良く芝生化し訪問した日も、土をいれる作業や見通しをよくするため起伏をならす作業が何人かのクラブスタッフによって行われていました。屋内練習場となるビニールハウスでたまたまお会いした芝生管理の支援企業の方は、使いながら芝生を育てることが大切だし、芝はもともと育つものという考えの中で、過保護にしすぎることが問題と話してくれました。その言葉はまるで子供のことを話すようで、やさしい響きがありました。あとからですがその方自身もクラブメンバーということを知り、クラブを育てようという思いの広がりも感じることができました。



クラブハウスの中や、周辺の施設も案内していただきましたが、限られた予算の中でいろいろな人が持っているものを出し合い作り上げようとしているのでしょう。今後、クラブは施設の充実、2019年のラグビーワールドカップの札幌開催やキャンプ地としての誘致活動、何より地域との連携を通じて定山溪や札幌にとってなくてはならない存在をめざしていくといたします。しかし、一方的にお願いするのではなく、例えばグラウンドのまわりに桜の植樹を行いつつ地域の方の桜の名所になることを考えたり、地域のイベントにスタッフ自ら参加し活動の場所として施設を提供したり、まずは一緒になって楽しんだりすることに、ラグビーの大会誘致などを通じて継続的に地域から信頼され貢献できる存在になれば、という考え方は、結果としてより強い結びつきを生む歩みになるのだと感じました。



共に作る仲間がいる、それがあたたかい
～ ウッドデッキも暖炉もひとつひとつが
手作りだという

札幌市内に戻り、次に日本ハムファイターズのボランティアの方と合流しました。その方の案内でまず向かったのは「大倉山」、1972年ですから38年前に札幌オリンピックのジャンプ（ラージヒル）が行われた場所でした。手入れの行き届いた施設はリフトで展望台まで登ることができ、寒い中途切れなく観光客がきていました。考えて見れば札幌はウィンタースポーツも楽しめる都市でした。急な傾斜をながめながらいつか生でみる機会があればと思う自分がいました。年間を通じて一級のスポーツを楽しめる都市は実は意外に少ないものです。そのことの価値を知りさまざまなスポーツをつなぐ工夫や人・組織ができれば札幌は名実共にスポーツ都市ということになるのかもしれない。



大倉山のジャンプ台からは札幌のまちに向かって飛ぶことになる、人はいつの時代も鳥にあこがれるものらしい

美しい景観をながめた後、夕暮れの市内を走り札幌ドームに向かいました。ドームに近づくとやや早足で歩く人々の流れ、少し離れた場所に車を止めて歩き出すと上着をきていても寒く感じられます。途中ドームの脇にサッカーのコートが置かれています。そうなのです、利用する際にはホバークラフトの原理で浮かび上がりドームの中に入れられる構造は世界唯一のものであり、だからこそコートはそこに実に無造作に置かれていたように思われたのです。

ドームの周りは当日券を買い求める多くの人々の列で私たちが30分ほど並ぶことになりました。入り口のゲートでは黄色いベストを着たボランティアが抽選券の配付をしています。聞けば毎試合30人から40人が案内やこうしたサンプリングを中心に活動しているそうです。以前、活動の中心となっていたエコ活動はお客様の意識が高まったという判断でボランティアの活動からははずれたのですが、帰り際にごみの状況を見ると想像以上に自ら分けている人々の姿が目立ちました。観客を信じ任せることも大切なことだと思います。札幌ドームは広く近代的な施設です。ともすると無機質な建物ですがボランティアの仲間が活動していると思うだけであったかい気分になれるのは一種の病気でしょうか。





ごみ箱を大きくわかりやすく工夫している
 設置場所も増やしている
 あとは観客を信じるだけ



ゲームは予想外に淡々とすすみ、若手中心で戦わざるを得なかった楽天イーグルスが勝ってしまいました。ゲーム中何度かあったボールスリーのシーンで札幌の観客は拍手で自分たちのチームの投手を励ましていました。やじるのではなく応援するという、そこに北海道のあたたかさを感じながらホテルに向かいました。

ひとつの町を地域を「スポーツ」のために訪れる人はどれだけいるのでしょうか。二日目は飛行機の出発までフリーで時間もあったので、市内のスポーツ施設と「スポーツの光景」を探してみることにしました。まずは地下鉄の一日券を購入、改札口に向かっていると見つけました。改札口近くにサッカーのコンサドーレ札幌の試合結果を表示している掲示板、ドームやチームのパンフレット、もちろん車内にもポスターを発見しました。



試合日	対戦相手	結果	得点	備考
1	札幌	0-2	0	
2	札幌	1-1	1	
3	札幌	2-1	2	
4	札幌	1-2	1	
5	札幌	1-0	1	
6	札幌	0-2	0	
7	札幌	1-3	1	
8	札幌	1-0	1	
9	札幌	2-1	2	
10	札幌	1-0	1	
11	札幌	0-1	0	
12	札幌	1-1	1	
13	札幌	1-0	1	
14	札幌	1-1	1	
15	札幌	1-0	1	
16	札幌	1-0	1	
17	札幌	1-0	1	
18	札幌	1-0	1	
19	札幌	1-0	1	
20	札幌	1-0	1	
21	札幌	1-0	1	
22	札幌	1-0	1	
23	札幌	1-0	1	
24	札幌	1-0	1	
25	札幌	1-0	1	
26	札幌	1-0	1	
27	札幌	1-0	1	
28	札幌	1-0	1	
29	札幌	1-0	1	
30	札幌	1-0	1	



どんな人がどんな思いで結果を書き込んでいるのか、白星が増えてほしいと思う

最初は「宮の沢」にあるコンサドーレ札幌の練習場へ、地下鉄駅を降りると交差点の角に赤と黒のフラッグに「交通安全」の文字、そこから少し歩くと歩道橋の階段がコンサカラーに塗られていて、ちょっと嬉しくなりました。そして、ひやりとした空気の中着いた練習場はレンガ色を基調に見るがわのことも考えた美しい施設でした。そこで見つけた一言「勝つまで負けるな」、日本ハムファイターズののぼりに書かれていた「諦める理由などない」と同じ強い激励というところでしょうか。

練習場のスタンドから練習風景をみつめる親子がいました。年配の男性もいました。細部までコンサドーレの造作にこだわった施設と、じっとそして熱心に練習をみつめる人々、それは何よりのクラブの財産であり、「J1へ復帰するために欠かせないものだと思います。



コンサの光景



続いて向かったのは昨夜観戦した札幌ドーム、あれだけ熱気に包まれていた場所の素顔をみてみたかったです。今日は地下鉄東豊線の終点福住駅で下車、改札口をでると通路にはファイターズの横断幕とバナーフラッグが目立ちドームまで誘導しています。シーズンが重なるサッカーのゲームのときにはコンサドーレに変わるのでしょうか。

ドームへの道の車販売店、コンビニなどの店頭にはファイターズの「諦める理由などない」という言葉の入ったのぼりが目立ちます。ポールや土台が共通ということはどこかが仕掛けているのでしょう。ともかくのぼりのおかげで観客は迷わずにドームまで歩くことができそうです。ドームはさすがに静かでまわりを一周したのですがグッズショップやレストランも閑散としていました。逆に昨夜みた外に置かれたサッカーコート隣の2面の天然芝のサッカーコートでは、祭日ということもあり子供達が元気に練習をしていました。ふと立ち止まりみるとなだらかな羊ヶ丘に続く傾斜地が広がっています。



トップとアマチュアの恵まれた施設があった

ドームをあとにし市内にもどり一度は名前に惹かれて「真駒内」までスケートリンクなどの施設をみるつもりで足を伸ばしましたが、駅からバスでいく必要があるということで断念、大通り公園まで戻ってみやげ物を買うためにぶらぶらとあるいてみました。今回の旅行を通じて、それぞれのスポーツ施設の完成度は高く、使う人々の目線で作られあるいは作ろうとされていることがよくわかりました。その背景には、観客や地域の人々も含めて強制的にではなくごく自然に一緒に作り上げよう、という思いがあったように感じました。あとは全国共通の課題でしょうが、今後ますます人口が減少し子供が減っていく中で、それぞれの施設や組織がよい意味でのネットワークを作り上げ、年間を通じてスポーツを「する・みる・ささえる」関係が作られれば、最高のスポーツモデル都市ができるのではないのでしょうか。改めて訪問することが楽しみになった旅行でした。最後に今回お世話になった皆様に感謝いたします。

ドーム周辺点描 ~ ゆったりとした時間が流れる

